

JAF AE Newsletter



No. 27 (January 2009)

第24回全国大会 / 青山学院大学にて開催

プログラム

日本「アジア英語」学会・第24回全国大会

大会テーマ：アジアにおける英語の諸役割

日時：2008年12月6日(土) 10:00 - 18:00

場所：青山学院大学 総合研究所ビル



プログラム

総合司会：齋藤智恵 (国際医療福祉大学)

開会の辞・会長挨拶：本名信行

(大会実行委員長・会長 青山学院大学)

基調講演 I

“The English Bilingualism of India and a Proposed Bilingual Pedagogical Model for Asian Englishes”

マシュー・バルギーズ (青山学院大学)

基調講演 II

“For Beautiful Human Harmony: Towards a Working Description of East Asian English”

米岡ジュリ (熊本学園大学)

研究発表 司会：三宅ひろ子 (青山学院大学)

“Do English and Non-English Major University Students Use Same EFL Speaking Strategies in Bangladesh?”

Quadir Mst. Moriam (広島大学大学院)

“The lexical foundation of English varieties”

Leah Gilner (名古屋外国語大学)

「日本の小学校英語教育の方向性について—アジアにおける英語の役割からの再考—」

伊東弥香 (東海大学)

「医療機関による情報ニーズへの言語対応の現状と課題：アジア英語研究の観点からの一考察」

岡部大祐 (青山学院大学大学院)

“Demotivators for teenagers in Japan: Does demotivation change in high school? What demotivates junior high students?”

濱田陽 (横手清陵学院高等学校)

“Beginner Level English Learners’ Reactions to NNS Reading Models”

川島智幸 (栃木県立鹿沼東高等学校)

「英語変種に対する言語態度：社会的地位と連帯意識の観点から—日本人大学生を対象にした量的研究—」

花元宏城 (関西大学大学院)

「大学生の国際英語に対する認識と将来の英語教育への展望—英語教職志望者を含む日本の大学生の調査より—」

田中富士美 (東洋英和女学院大学)

シンポジウム

「近隣諸国における英語教育政策

—英語への役割認識の違いから—」

司会：猿橋順子 (青山学院大学)

発題者：

本名信行 (青山学院大学)

竹下裕子 (東洋英和女学院大学)

樋口謙一郎 (椋山女学園大学)

ディスカッサント：

石田雅近 (清泉女子大学)

橋内武（桃山学院大学）

閉会の辞：榎木蘭鉄也（秋田県立大学）

懇親会：野菜畑

J A F A E 全国大会報告

第 24 回全国大会を振り返って

榎木蘭鉄也（秋田県立大学）

大会前日の東京は雨で、参加者が少ないのではと心配したが、その心配は杞憂に終わり、大会当日は晴天で、会場はほぼ満席の盛況であった。今回の大会は今までになく質量ともに充実し、豪華な 2 件の基調講演で始まり、新進気鋭の若手による研究発表 8 件へと続き、シンポジウムで締めくくられた。



まず、基調講演だが、1 件目の“The English Bilingualism of India and a Proposed Bilingual Pedagogical Model for Asian Englishes”の講演者 Mathew Varghese 氏はインド古典哲学で学位を得た碩学であるが、日本では英語を教え、現在はバイリンガリズムや異文化間コミュニケーションに関心を持っている。氏はインドの多言語使用と英語使用の状況を概観した後、国際化時代に対応してゆくために、チョムスキーの拡大標準理論と脳科学の知見を盛り込んだ英語教育法を提案した。

2 件目の基調講演は、米岡ジュリ氏による“For Beautiful Human Harmony: Towards a Working Description of CJK English”である（発

表時に氏は講演題目の East Asia English を CJK English と変更。なお、CJK は China, Japan, Korea の意味）。日本をはじめ東アジアの英語教育や言語に精通している氏は、ヨーロッパ英語や南アジア英語のように地域ごとに英語の集合体があるように、東アジアにも中国英語・韓国英語・日本語英語の集合体「CJK English」があると指摘した。特に、各国の英語の特徴の実例をふまえ、氏が CJK English の共通部分を“Engrish”（I が r となっている！）と指摘したのは秀逸であった。



研究発表の 1 件目は、Quadir Mst. Moriam 氏による“Do English and Non-English Major University Students Use Same EFL Speaking Strategies in Bangladesh”である。バングラデシュの英語専攻学生と非専攻学生の英語を話すときの strategy に関するこの発表は非常に貴重だと思われる。2 件目は Leah Gilner 氏による“The lexical foundation of English varieties”で、英語のどの変種でも頻出語 2,000 語はほぼ共通しており、それら 2,000 語がどの英語変種とのコミュニケーションにも役立つ中立的語彙なので、優先的に学習させるべきだと指摘した。3 件目は伊東弥香氏による「日本の小学校英語教育の方向性についてーアジアにおける英語の役割からの再考」で、氏は小学校英語教育の主たる担い手である学級担任が英語力や指導法に不安を感じながら現場に立っている問題を提起し、今後の小学校英語教育の方向性を展望した。4 件目は岡部大祐氏による「医療機関による情報ニーズへの言語対応の現状と課

題: アジア英語研究の観点からの一考察」で、医療機関のウェブサイトの英語での言語対応についての調査結果が報告された。医療機関の言語サービスの学術研究はあまり開拓されておらず、今後のさらなる研究が期待される。

研究発表後半は濱田陽氏による "Demotivators for teenagers in Japan: Does demotivation change in high school? What demotivates junior high students?" で始まった。現場教師である氏は、中学生がいつなぜやる気を失うのかを調査し、多くが中学 2 年生頃にテストや授業や教師の授業のやり方のために自信を失ったりやる気をなくしたりすることを報告した。6 件目は川島智幸氏による "Beginner Level English Learners' Reactions to NNS Reading Models" で、日本の高校生の非英語母語話者の朗読に対する反応の調査報告で、日本の高校生は英語の熟達度が高いほど非母語英語に対して肯定的反応を、熟達度が低いほど否定的反応を示すことが報告された。7 件目は花元宏城氏による「英語変種に対する言語態度: 社会的地位と連帯意識の観点から—日本人学生を対象にした量的研究」で、日本人学生が日本英語を含む非母語英語よりも英米の母語英語に社会的地位があると考えているが、反面、非母語英語に対して連帯意識を抱いていることが指摘された。最後の研究発表である「大学生の国際英語に対する認識と将来の英語教育への展望—英語教職志望者を含む日本の大学生の調査より」で、田中富士美氏は中京大学国際英語学部の学生および椋山女学園大学英語教職履修者・英語非専攻者へ実施した、国際英語観のアンケート調査と面接調査の報告をおこなった。この報告で、国際英語の理念に基づいて設置された中京大学国際英語学部の学生の多くが、英語は母語話者だけではなく全ての英語使用者のものだという国際英語観を持っていることが確認された。総じて、研究発表はよく準備されており、質が高かった。

大会の最後を飾ったシンポジウム「近隣諸国における英語教育政策—英語への役割認識の違いから—」には、本名会長・橋内理事・石田理事・竹

下理事ら重鎮の他、新進気鋭の猿橋順子氏・樋口理事という本学会を代表する顔ぶれが並んだ。内容に関しては別項で詳しく報告されるので本稿では詳細を省くが、時間をかけながら現場からのボトムアップで英語教育政策をすすめる日本とは対照的に、トップダウンで迅速に英語教育政策を進めるマレーシアの事例を発表した本名会長の発題が特に興味深かった。

今回は発表件数が多くて進行時間がおしつまり気味だったため、質疑応答の機会が少なかったが、その分、懇親会が談論風発の場となった。懇親会は表参道の「野菜畑」なる店でおこなわれたが、店名に相反して贅沢な肉料理が次々と出され、参加者一同、ご馳走を心ゆくまで満喫しつつ学問談義に花を咲かせた。次回は、熊本で大会が開催されるとのこと、名物の馬刺と焼酎での学問談義を楽しみにしたい。

また、今回は法人会員の東京外国語センターからも数名の方が大会・懇親会ともに参加され、企業研修をしているお立場から当学会での活動や成果が非常に参考になるとのお言葉を懇親会で頂戴した。アジアの英語は経済と密接にリンクしている。今後、本学会でおこなわれる研究は、経済界・産業界の注目をいっそう集めるであろう。



シンポジウム・レビュー

近隣諸国における英語教育政策

～英語への役割認識の違いから～

猿橋順子（青山学院大学）

題記のシンポジウムは、本名信行氏（本学会会長・青山学院大学）、竹下裕子氏（東洋英和女学院大学）、樋口謙一郎氏（椋山女学園大学）の発表の後、橋内武氏（桃山学院大学）、石田雅近氏（清泉女子大学）をディスカッサントとして迎え、討論を行うという盛り沢山の活気に満ちたセッションとなった。司会は筆者が務めた。



シンポジウムの目的は、平成 19 年度に完了した文部科学省の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」（以下、「行動計画」）を、近隣諸国の英語教育政策と比較し、その成果を評価し、将来的な展望を示すことである。比較対象国は、タイ、マレーシア、中国、韓国で、各国の英語に対する役割認識が、政策にいかなる影響を及ぼすかが、以下の 5 項目に絞って論じられた。

第 1 点は政策立案・実施方式である。マレーシアおよび韓国では、英語教育は国家ビジョンと密接に関連し、首相や大統領など政府首脳が直接関与する国家プロジェクトの一部として、トップダウンの迅速な意思決定と実施がなされる。日本では、小学校英語活動の導入に顕著のように、全国津々浦々に準備を整え、最大限の民意の調整が優先されるため、抜本的な改革は遅れがちになる。

反面、平等志向性があり、諸外国で懸念される格差の問題は、相対的に抑えられている。政策決定方式が演繹的か帰納的かという違いが見られる。

第 2 点は到達目標とその測定である。「行動計画」は、日本の現代英語教育史上、初めて具体的な到達数値目標を示したが、「行動計画」の完了時点の達成度は、30%程度に留まる結果となった。この事実が目標設定の妥当性を批判する論調につながったことは否めない。一方、中国では初等教育から高等教育までを網羅する独自の到達目標（9 レベル）が導入されており、日本にとっても大いに学ぶところのある事例と言える。

第 3 点は教員研修および教員養成である。タイでは英語教育機会と質の地域格差が従来から大きな課題であったが、新たな英語教育改革政策のもと、全国規模の教員研修が展開されている。日本の「行動計画」でも、現職教員の研修に重きが置かれた。一方、教員養成課程の改革は手付かずと言ってよく、今後の重要課題のひとつである。

第 4 点は英語学習の動機付けである。マレーシア、中国、韓国のように国家の経済政策と英語教育の結びつきが強い国々では、英語の到達度は入試、卒業、就職のあらゆる面で重視され、結果、学習者は否応なしに英語学習に駆り立てられる傾向がある。日本の「行動計画」では、海外留学や国際交流、独自の取り組みを支援する SELHi の導入など、学習者の意欲に働きかける施策に富んでいる点が評価される。

第 5 点は大学英語教育についてである。「行動計画」は大学卒業時に求められる到達目標に言及したが、それは具体性と牽引力に欠けるものであった。中国では、英語力を大学の卒業要件としている。同時に、卒業要件を満たすことのみが英語学習の誘引になってしまうというデメリットも指摘される。

これらの点を踏まえた上で、討論では以下が確認された。日本の英語教育政策を諸外国の取り組みと比較してみると、良し悪しは別として、各々の手法が持つ特徴と長所、短所が見えてくる。また、総じて日本の英語教育改革は、用意周到で慎

重である半面、大きな遅れを取っている。今こそ、日本は、諸外国の進展と課題に学びながら、いかなる道筋を辿るのかを決断する時である。多忙な教育現場に新しい英語教育の息吹をいかに吹き込めるかは、現場教員だけの課題でも、英語教育界だけの課題でもない。日本社会全体で、あるいは近隣諸国との友好的な連携により、知恵を出し合うことで、新たな道を切り開いていくことが可能なのである。

個人的には、シンポジウムの企画段階から本稿の執筆にいたるまで、シンポジストの諸先生方から実に多くのことを学ばせていただいた。ここに心から感謝の意を表したい。



全国大会に参加して

濱田 陽(横手清陵学院高等学校)

今回、初めて全国大会に参加、さらに発表までさせて頂きました。暖かく見守って下さいました事務局の先生をはじめ、ご清聴下さいました先生方に、改めて感謝申し上げます。今まで本や文献でしかお会いした事のなかった先生方を前に、一日中緊張の連続でしたが、背伸びしながら私自身最大限学ぶ事ができたと感じております。大会を通して、改めて“English”の可能性・面白さも実感致しました。この先は、さらに研究を深め、教育・社会に貢献できますよう精進致しますので、何卒よろしくお願い致します。

◇◇◇◆◇◇◇◆◇◇◇

花元宏城(関西大学大学院)

今回初めて日本「アジア英語」学会に参加し、

そして研究発表もさせて頂きました。今まで周りに同じような分野を研究されている方がいなかったため、この学会を紹介していただいた時の感動は今でも忘れることができません。そうして迎えた今回の発表。Asian Englishes を専門とされている先生方の前での発表は、緊張と嬉しさでいっぱいでした。私にとってあの 20 分は、夢のような時間でした。そして発表後、また懇親会でもたくさんの方から有意義なコメントをいただき、まだまだ勉強不足な私ですが、今後の研究に生か



していきたいと強く感じました。何かと至らない点はあったと思いますが、温かく接していただいた本名先生はじめ、実行委員の先生方に心より感謝いたします。

新 刊 書 籍 紹 介



English as a Multicultural Language in Asian Contexts: Issues and Ideas

Nobuyuki HONNA

Kuroshio Publishers

ISBN: 978-4-87424-424-1

紹介者：岡裏佳幸(福岡工業大)

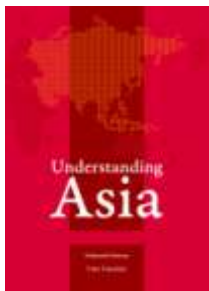
本書は、アジアにおける多文化間言語としての英語に関するさまざまな問題を指摘し、その解決策を提示する。

全体は 7 章から成る。まず、第 1 章は、多文化間コミュニケーションのための国際言語としての英語について論じる。この中で、国際化と変容に言及する。すなわち、英語の国際化に伴って英語が変容する、と筆者は主張している。第 2 章では、世界の多くの地域において、英語が国内コミュニケーション、国際コミュニケーションのた

めの言語としての役割を果たしており、アジアにおいても共通語となっていることを、シンガポールとインドの例を挙げて説明している。第3章は、言語接触によって必然的に多様化が生まれると指摘する。これはアジア英語にも当てはまり、二ホン英語も例外ではない。そのため、日本でも多様化に対応した英語教育が求められている。第4章では、多様化のマネジメントにおいて、メタファー理解、言語意識が重要であると述べている。第5章は、英語から日本語への語彙的、文法的、語用論的借用を、構造的、機能的、社会言語学的観点から検証している。英語の単語が日本語の語彙の一部となる過程や英語の借用語と結びついた日本語の単語など、豊富な例を引用して解説する。語彙マニアの好奇心を掻き立てる。第6章では、言語監査という新しい概念を紹介している。言語監査は、1. ニーズ・アナリシス、2. 対応評価、3. 研修プログラムの提案、4. 研修プログラムのモニター、5. 研修成果評価、の流れでおこなわれる。言語監査は、企業、自治体などにおいて、今後ますます重要性が高まるであろう。最後に、第7章では、自分自身や自文化を英語で表現することが必要であると主張する。自己表現活動の一例として、ESSC (Extremely Short Story Competition) に言及している。

本書が、アジア英語研究者にとって必携の書であることは言うまでもないが、すべての英語教員にとっても座右の書となるにちがいない。自信を持ってお薦めできる一冊である。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



Understanding Asia

Nobuyuki HONNA,
Yuko TAKESHITA

CENGAGE Learning
ISBN: 978-4-86312-101-0

紹介者：田中孝宜（名古屋大

学国際開発研究科博士課程後期・NHK アナウンサー）

「Understanding Asia」のために「国際英語」への理解を深めようというのが、本書の意図するところであろう。アジアの12の国・地域の英語が紹介されている。

まず、各国の専門家が、最近の社会動向や英語教育について紹介する。それを受けた読解問題が付いている。リスニング練習では、著者がインタビューした各国出身者の生の声に触れることができ、それぞれの英語の特徴について短い解説もある。発音や語彙、文法など、「国際英語」の多様性を学ぶことができ、興味深い。各国の英語の特徴を知っておくことは、実際のコミュニケーションの場で役立つだろう。また、本書の中のシンガポールやフィリピンの方は、自国民同士で話す「シングリッシュ」や「タガリッシュ」ではなく「国際英語」を話している。この意識は大切だ。日本人も、ジャパニーズ・イングリッシュを「ネイティブから見て間違い」とするのではなく、その特徴を自ら理解し、それを踏まえて、気楽に英語を話せばいい。

「国際英語」について、具体的にイメージできないという学生にとって、本書は生きた教材である。付属CDで、様々な英語を聞くことで、英語は米英だけのものではなく、多文化間交流のための言語であるということを感じることができる。世界では、ノンネイティブの英語を話す人口の方が多いのである。

私自身も本書の日本人英語の章に登場する。自分の取材経験から、アジアで英語を使う機会が多いと述べた。実際に、本書に登場する国・地域の英語はすべて体験済みである。最近もタイに行き、両手を合わせて“Thank you”と英語で話をしてきた。英語だから欧米人のように握手しなければいけないのではない。お互いに理解できればいい。「国連では、インド人を黙らせることと、日本人にしゃべらせることが一番難しい」というジョークがあるらしいが、ジャパニーズ・イングリッシュで、胸をはって堂々と英語を使い、日本のことを海外の人に説明できる若い人が増えてほしい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



「小学校英語を考える」
寺島隆吉
『2008年版 学習指導要領
を読む視点』より
(第11章 pp 163-188)
白澤社
ISBN: 978-4-7684-7925-4

紹介者：田中富士美（東洋英和女学院大学）

これからの日本の教育はどこに向かうのか。本書では、2008年2月に公表された「新・学習指導要領案」を俎上にのせ、13人の教育問題の論客が、「国語」、社会「理科」「道徳」など分野別に問題点を読み解く。

今回の学習指導要領には、小学校での英語活動の必修化が盛り込まれた。5、6年生が、年間35時間、英語を勉強することになる。期待する声がある一方で、疑問や不安の声も多い。本書の中で、岐阜大学の寺島隆吉氏は、インタビューに答える形で、英語の早期教育は「親が望むようなかたちでは効果が上がらない」と断じる。小学生を持つ親としては、学習のスタートが早ければ中学以降の伸びが大きくなると期待しているかもしれない。それに対して寺島氏は、「英語力を本当につけたいのだったら、母語の訓練をきちっとやること」と、日本語の重要性を強調する。簡単な日常会話ならともかく、読解力や表現力が問われる「学習言語」としての英語は、「母語の基礎体力」がある方が長期的に見て伸びが大きいという。そして、暗記の英語教育ではなく、子供たちが自分の考えを持ち、それを自分の言葉で表現できるように授業を目指すべきだと提言する。寺島氏は、このほかにも英語一辺倒ではない「複数言語主義」、母語を映す「鏡としての外国語」など、鋭い視点を提供している。英語教育を入口に、本書の全体テーマである日本の教育問題の核心を付いている。

新学習指導要領では「生きる力」を身につけることが大目標になっている。英語は、激変するグローバル社会において、日本人が世界の人たちと協調しながら「生きるために必要な力」となる。

何のために、どんな効果を期待しての早期英語教育なのか—小学校の英語活動。

本書は、英語教育者はもちろん、英語を教えることになる現場の小学校教諭や子どもを持つ親にも、日本人が長年格闘を続けている「英語」について改めて考える視座を与えてくれるだろう。

事務局からのお知らせ

本学会は、2009年9月18, 19, 20日、熊本学園大学で開催される IAICS を共催し、最終日20日を本学会第25回全国大会の日といたします。IAICS 3日間の参加をご希望のかたの申し込みは、IAICS ホームページより所定の手続きを経て行っていただきますが、20日のみの参加をご希望のかたは、通常の JAF AE への参加と変わりません。20日には基調講演、研究発表、会員総会、懇親会を予定しております。総会を除き、IAICS と合同で行いますのでご了承ください。

なお、IAICS のホームページも合わせてごらんください。<<http://www.uri.edu/iaics/index.php>>
IAICS の研究発表等の申込締切は5月15日です。

第25回全国大会研究発表者募集

第25回全国大会（2009年9月20日〈日〉於熊本学園大学）で研究発表を希望される会員は、アブストラクト（日英どちらか）をA4 Word文書1枚にまとめ、6月6日（土）までに事務局に電子メールの添付にてお送りください[jafae@live.jp]。審査を経て発表者を決定いたします。

CALL FOR PAPERS

for the 25th National Conference on
September 20th, 2009 at Kumamoto Gakuen
University.

Please submit a 1-page abstract as MS Word attachment by June 6th, 2009, to the JAF AE Secretariat at [jafae@live.jp]. All submissions will be carefully reviewed.

会計・会員管理担当より

今年度の会費を納めていない方は納入方お願い致します。

会費は、一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円。

郵便振込先は、

加入者名：日本「アジア英語」学会

口座番号：00280-8-3239 です。

(会計・会員管理担当・樋口謙一郎)

ニュースレター編集担当より

JAF AE ニュースレター28号は5月下旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに800~1,200字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。

書いてみようというご意志がありましたら、3月中旬までに編集担当(相川)までお知らせください。アドレスは aikawa@nnc.or.jp です。

アジア地域の学会情報

CamTESOL, 5th CamTESOL Conference on English Language Teaching

Theme: The Globalisation of ELT: Emerging Directions

Date: 21-22 February, 2009

Venue: National Institute of Education (NIE)

Web site: <http://www.camtesol.org>

TESOL Arabia

Theme: Learning in English: English in Learning

Date: 12-14 March, 2009

Venue: J.W. Marriot Hotel, Dubai, United Arab Emirates

Web site <http://tesolarabia.com>

RELC Seminar 2009

Theme: The Impact of Technology on Language Learning and Teaching: What, How and Why

Date: 20-22 April, 2009

Venue: SEAMEO Regional Language Centre

Web site: <http://www.relc.org.sg/>

The Malaysian English Language Teaching Association (MELTA). 18th International Conference 2009

Theme: Aligning Teaching and Learning Effective

Methodologies in English Language Education

Date: 11-13 June, 2009

Venue: Puteri Pacific Hotel, Johor Bahru, Johor

Web site:

http://www.melta.org.my/conference_2009

Penang English Language Learning & Teaching Association (PELLTA)

Theme: Matters: New Ways of Looking at English Language Teaching & Learning

Date: 22-24 June, 2009

Venue: Bayview Hotel, Georgetown, Penang, Malaysia

Web site: <http://pellta.tripod.com>

English Language Teacher's Association of India

Theme: Managing Mixed-Ability Classes

Date: 21-23 July, 2009

Web site: <http://www.eltai.org>

【編集後記】

2009年1月20日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)すずき印刷

事務局

〒226-0015

神奈川県横浜市緑区三保町 32

東洋英和女学院大学国際社会学部

竹下裕子研究室内

Fax: 045-922-6642 E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Yuko Takeshita

Faculty of Social Sciences

Toyo Eiwa University

32 Miho-cho, Midori-ku, Yokohama-shi,

Kanagawa 226-0015 JAPAN

FAX: +81-45-922-6642

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239